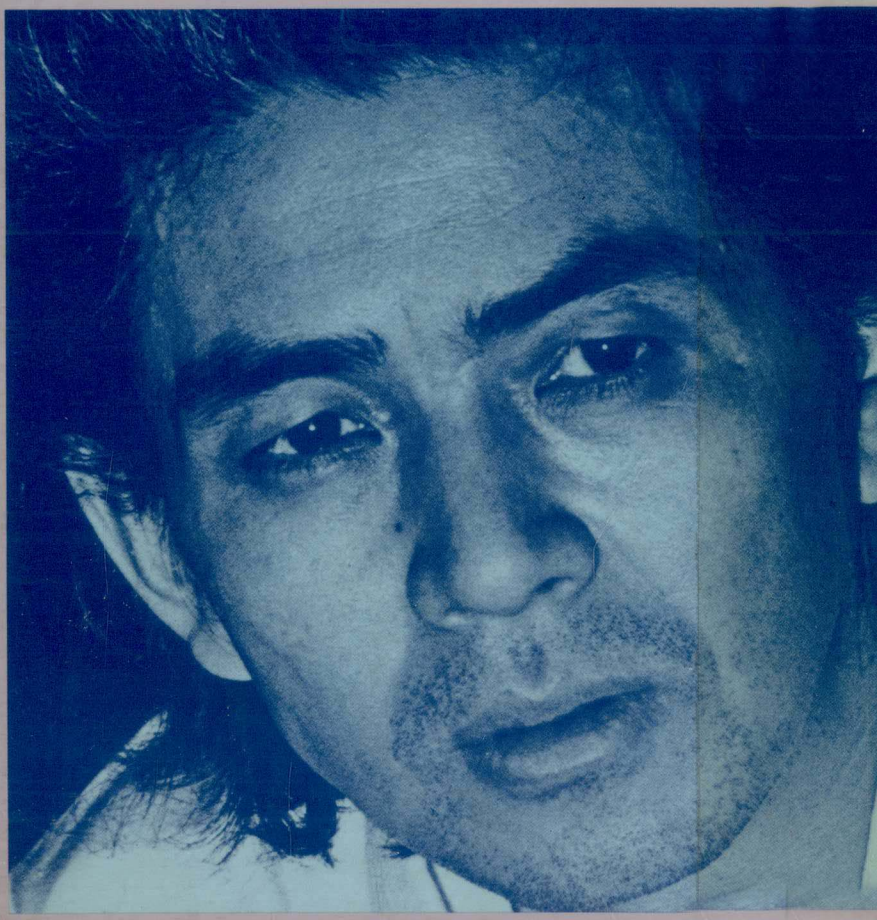
雑民の魂

五木寛之をどう読むか

駒尺 喜美



雑民の魂

五木寛之をどう読むか

喜美

講談社

駒尺喜美（こまじゃくきみ）
一九二五年、大阪に生まれる。京都人文学園に学び、その後、法政大学に学ぶ。現在、法政大学教養部教授。
著書　芥川龍之介の世界　法政大学出版局
漱石・その自己本位と連帯と　八木書店

雑民の魂　五木寛之をどう読むか
八八〇円
第1刷発行　一九七七年七月二十日

著　者　駒尺喜美
発行者　野間省一
発行所　株式会社　講談社
東京都文京区音羽二―一二―二一
〒一一二　振替　東京八―三九三〇
電話　東京（〇三）九四五―一一一一（大代表）
印刷所　豊国印刷株式会社
製本所　黒柳製本株式会社
落丁本・乱丁本はお取り替えいたします。
©駒尺喜美　一九七七年　Printed in Japan
（文2）

0095-305112-2253（0）

雑民の魂　五木寛之をどう読むか　目次

まえがきとしてミーハーの声――5
亜エリートの息子――9
堕ちた人――13
外地引き揚げ体験――20
焼きごての当たっている原体験――25
原罪よりも現罪――29
叫びへの響鳴――34
階級のかなた――雑民の思座――43
デラシネの隠密――50
『さらばモスクワ愚連隊』――58
サブ・カルチュアの戦士――72
反芸術的芸術論（「読み物」「作家の誕生」）――76
共生の思想――82
演歌的なるもの――88
艶歌的なるもの――95

さまざまな読み物　低音部1——101
さまざまな読み物　低音部2——106
さまざまな読み物　高音部1——113
さまざまな読み物　高音部2——117
三部作　その1——125
三部作　その2——136
三部作の完成——141
五木のエッセイ——153
五木寛之と女——159
『幻の女』——167
性の神話をめぐって——176
〈雑〉の精神——186
ナショナリズムとインターナショナリズム——192
循環の思想——197
『戒厳令の夜』——203
あとがきとして筆者の声——211

デザイン　村山豊夫
写真　操上和美

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

雑民の魂

五木寛之をどう読むか

まえがきとしてミーハーの声

ここ二、三年来、わたしは人の顔を見るごとに、五木寛之がああいっているこういっているとしゃべり散らしていたので、ある友人は、わたしのことを五木の顔にいかれているのだ、と気の利いた批評をしてくれた。

だが残念ながら、わたしが五木の顔写真をまじまじと見つめたのは、すっかり彼にいかれてしまってからのことであった。とはいうものの、今はもちろん彼の顔も好きである。本当は彼の写真に（著書にではなく）サインをもらって、桐の箱にでも納めておきたい心境である。久しぶりにわたしは「ファン」の心境をとりもどして、水を得た魚のような気

持である。

久しぶりにと書いたが、本当に久しぶりである。わたしは十五歳から二十歳までミーハーの生活を満喫していた。毎夜のごとく大阪ミナミの歓楽街をうろついて、劇場やダンス・ホールの中で生活の大半を過ごしていた。緞帳の降りた後の興奮、楽屋への階段、ドーランのかおり、深夜の楽屋口の灯、ダンス・ホールでのバンド・マンとのウインク、ラスト・ナンバーの時のミラクルボールのきらめき等々が、今でもはっきりわたしの眼に浮かび匂ってくる。楽の日に飛ばした風船、サイン入りの座蒲団、のれん、風呂敷、みんな懐しく思い出す。

それらを思い出している今のわたしは、不本意ながらも、おそらくは浅草の劇場へ通っていた永井荷風の眼に近づいているのだろうけれど、当時のわたしは、もっと単純にミーハーそのものとして生きていた。楽屋裏の凍てつくような道に立って、おめあての人の出てくるのを、一時間でも二時間でも待っていたものである。宣伝用に貼り出されているポスターを盗むために、人の寝静まった深夜に出かけていって、こっそりはがしてきたこともあった。

それは戦前の話であって、当時の女学生は親のつきそいなしには百貨店や飲食店へも入ってはいけないことになっていたから、当然わたしは不良少女として補導されたり、一度

は危く退学になりかけたこともあった。が、それでもわたしは一向にこりなかった。戦争もたけなわとなってからも、わたしは相も変わらず、毎夜のように家にはいなかった。千日前の交番の巡査から非国民とののしられたこともあったが、どこ吹く風であった。空襲で自分の家が焼けた夜も、実はわたしは家にいなかったのである。心斎橋、道頓堀、千日前は一夜にして灰になってしまったが、その後も焼け残っている場末の歓楽街をうろついていた。空襲が一段と激しくなって、焼夷弾、爆弾、機銃掃射を雨あられと受けて、今生きていることが不思議に思えるような経験もしたが、それは自分の家や職場（その頃はもう形だけではあるが勤めていたのである）ではなく、遊び先においてであった。それは戦時中であったか敗戦直後であっただろうか、板張りシートの汽車に乗って、地方巡業を追っかけていったこともある。吹き上げる風をさけるために、座席に新聞紙を敷いて坐ったことも思い出す。

わたしは、そのようにして青春を過ごしたのであった。だが、今わたしがそのようなことを、平気で書けるようになったのは、それは全く五木寛之のおかげなのである。

人は誰しもいくつかの顔を持っているのであろう。が、わたしの場合、もっとも大きく対立している二つの顔は、インテリとしての顔とミーハーの顔である。だがありていにい

うと、わたしはおおむねミーハーの顔をおしころして生活しているようである。それは大学を職場にしているので、何となくインテリのような顔をしていなくては、まわりの人たちに相済まぬといった気持もあるにはあるのだが、やっぱり自分の心の真底をのぞくと、自分で自分の中のミーハーを軽蔑していたのだと思う。だからミーハーの顔を意識してかくすつもりはなくとも、自然にその面を出さぬような結果になっていたと思う。それでいて、わたしはインテリ嫌いをかなり表面に出してきた。そのようなわたしのコンプレックスは、自分がとうていインテリにはなれぬという悔しさからくるものでもあろうけど、本当は自分の中のミーハーが、生理的にインテリに反発していたのだと思う。

そのことに気づかせてくれたのが五木寛之であった。わたしが恥ずかしいものとして、自分の片隅に押しやっていたものに、五木はそっと優しい手を差しのべてくれた。そして今のわたしにとって一番難しいことは、インテリになることではなく、むしろミーハーの立場を失わないことであることを教えてくれた。五木は、わたしの中に眠っていたミーハー魂をゆさぶり起こし、それを解放すると同時に、それをこそわたしの原点とすべきだと気づかせてくれたのであった。

わたしが五木寛之にひかれるのは、何よりもまず、彼がミーハーの味方だからである。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

〈付記〉

このイントロの部分を書き終わってから、ふと気づいたのだが、ミーハーとは一体何ですか、それは庶民ですか未組織労働者ですか、などという質問が出ないかということである。そんな意地の悪い質問をする人は、ミーハーの中には絶対にいないのだが、もしかすればミーハー以外の人も、この本をよむかもしれないので、そのことをちょっと考えてみた。あらゆる意味での弱者、権威も権力も持たぬ人、知力や金力で人を支配する側に廻らぬ人、等々と考えてみたが、苦しまぎれに一言で規定してしまうと、受身の場で生きている人々のこと、操(あやつ)られる側の人間、とそういっておこうと思う。

一　亜エリートの息子

ところで、五木寛之は必ずしもミーハーとして育った人ではない。

「生れたのは福岡県である。生後、間もなく両親におぶわれ、関釜連絡船で玄界灘をこえた。関釜連絡船。帝国主義日本の大陸へのかけ橋であった」(『にっぽん漂流』)

五木は帝国主義日本の植民地、朝鮮の地で育った。彼の父は教育者であって、彼は毎朝父の前に坐らされて『古事記』を読まされ、『万葉集』や『歳時記』を愛読したという。『風に吹かれて』の中で五木は、「戦没学生の手記を読んで、私は彼らが古今東西の古典を驚くほど読んでいることに、一種の反発を憶えずにはいられなかった。私たちはオショー・ショーコーであり、オヨソグンジンニハ、カミゲンスイヨリシモイッソツニイタルマデ……だからである」と、書いているが、子供の時から『古事記』を読み、俳句をつくったという五木の話を読むと、子供時代には、書物と名のつくものは一冊も、絵本や漫画本も目にしたことのなかったわたしもまた、一種の反発を憶えずにはいられない。五木の両親は教育者であり、特に父親は視学の席をめざして着々と進んでいて、その長男として生まれた彼は、日本の歴史が順調（？）に進んでいれば、エリートとして育ったにちがいない。底辺商人の子、それも女の子であったわたしの怨念が働いて、思わずペンがすべったが、もう少し詳しくいうと、五木一家は亜エリートというべきであろう。

「私が五歳か六歳くらいの頃、私たち一家は韓国の片田舎へ移り住んだ。父はその村の小学校の校長に任命されたのである。その村には、日本人は私たちを含めて二家族だけしか住んでいなかった。私たちがその村へ車で近づいて行くと、村のおもだった人々が、唯一の先住日本人であった警察官を先頭に、赤松の林のはずれまで迎えにやってきていた。……

私たちが村の入口の橋の近くへさしかかると、手に手に日の丸の小旗を持った児童たちが道の両側に並んで、私たち、校長一家を迎えているのが見えた。『天皇陛下みたいだ』と、私は思わず言った」(『地図のない旅』)

五木一家は、支配民族の、まさに最先端に立っていたことになる。本当のエリートは、最先端になど身をさらさぬものである。校長とはいえ、日本人学校の平教員よりは下であったという。エリートでないものがエリートの仲間入りをするためには、支配者としての末端、即ち支配の最先端に立って、自分よりもさらに弱い者を、直接その手で組みしくしかない。

「私の父は九州の農家の子弟として生れ、上昇志向を胸に抱いて給費師範学校生徒として帝国官吏の最末端につながった。そして私の記憶に残っている父のイメージは、毎夜、夜が白むまでランプの灯の下で検定試験のための受験勉強に血走った目を光らせていた中年男である。

そしてもう一つ、深夜の学校の奉安殿の夜目にも白い桜の満開の下で、樹の幹につないだ朝鮮人学生を竹刀で掛声とともに打ちすえていた父の姿である。寮の門限を破った学生が『哀号!』と身もだえるたびに白い桜の花弁が降るように散るのだった」(『深夜の自画像』)

帝国主義日本の内部では下積みであり、だがその下積みに甘んじることのできぬ覇気の

ある人間が、外地侵略の先端に立っていた姿を、五木はこの父親に対する二つのイメージでぴたりと押えている。山奥の二、三男に生まれた五木の父は、受けつぐべき田も山もなかった。底辺の世界に埋没せぬためには、軍人になるか教師になるかのどちらかである。彼は国家の給費制度を利用して教師となった。しかし内地で平教師以上に昇格する望みはなかったので、新天地を求めて植民地へ出た。必死の努力で資格検定試験を次々と合格し、教育界の階段をよじ登っていった。そして視学の地位が目の前に近づいてきたとき、突然敗戦がやってきた。

日本帝国主義がそのままに進んでいれば、もし日本が戦勝していれば、亜エリート二世であり、頭もよかったらしい五木寛之は、今度は亜エリートでなく本物のエリート・コースを歩んでいたであろう。だが、ある朝突然、転落の日がやってきた。植民地での敗戦は、文字通りのどんでん返しである。支配民族の息子から、追放民族・難民の息子に突き落とされたのであった。五木寛之、十三歳の時である。

二　堕ちた人

「人は正しく堕ちる道を堕ちきることが必要なのだ。そして人のごとくに日本もまた堕ちることが必要であろう。堕ちる道を堕ちきることによって、自分自身を発見し、救わなければならない」という、坂口安吾の『堕落論』は、いまにしておもえば実に的確な発言であった。日本国も日本人も堕ちきることが必要であったのだ。敗戦という未曾有の出来事に直面しながら、なおかつ、堕ちきることのなかったことこそが、敗戦という事実そのものより以上の悲劇であった。「天皇制が存続し、かかる歴史的カラクリが日本の観念に残って作用するかぎり、日本に人間の、人性の正しい開花はのぞむことができないのだ」と、安吾は危惧しているがそのとおりの結果になってしまった。敗戦という千載一遇の好機に接しながら、わが国は、ついに堕ちきることがなかった故に、またぞろ軍隊をつくり、開発途上国を餌食にしはじめている。「我々は再び昔日の欺瞞の国へ逆戻り」してしまったのである。だが、おもえば、多くの都市を爆破され原子爆弾まで浴びながら、その廃墟

に立って、安吾が「堕ちよ」と叫ばなければならなかったというその事実の中に、わたしたちの微温的精神が無傷であったことの逆証明がある。「あの偉大な破壊の下では、運命はあったが、堕落はなかった」と安吾をして歎かしめたように、敗戦時の日本は、堕ちるべき現実に直面していながら、それでもなお堕ちえぬという奇妙な精神的状況にあったのだ。

だがしかし、極く少数ではあるが、確かに堕ちた者もあったのである。例えばここに一枚のタブロオがある。地べたに衣料をひろげた店、トタン板の上で目の赤くなった鰯をのせてじゅうじゅうと煙を立てて焼いている店、おむすびの上に蠅が群がりたかっている屋台。炎天下の闇市はごったがえす人出である。裸同然の男やシュミーズにスカートだけつけた女、兵隊靴の男、etc.ろくな風体の人間はいない。が、その中に、ひときわ人眼をひく一人の少年が立っている。どす黒いボロをまとっているが、肌は芥と垢が鱗形の隈をとっていて、ボロと肌のけじめがつかない。頭から顔にかけては、えたいの知れぬデキモノでおおわれており、そのウミとかさぶたは、つんと眼鼻を突き刺すまでの悪臭を放っている。この世ならぬまでの不潔と悪臭にみちたこの少年の姿には、さすがの闇市人種も怖れをなして遠まきにしている。このタブロオは、すでにお察しの向きもあるだろうが、石川淳描くところの『焼跡のイエス』である。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.